



Breeze

puffpuff



桜並木を歩いていたら、どこからか春風に乗って

遠い記憶がやってきた

ああ、この匂い、この懐かしさ、この柔らかさ

父に手をひかれて歩いた田んぼの畦道

小川をゆらゆらと流れるお日さまの光

れんげ畑を渡るそよ風のかおり

幾度となく春がすぎ、その度に記憶が重なり

もういつのことだかわからないのに

ふとノスタルジックになって涙をこらえた

後悔しないで



過ぎ去ったこと悔やまないで

時間は後戻りしないから

楽しかったこと 辛かったこと

思い出いっぱいのやさしいあなた

そんなあなたが私の一番の味方



贅沢すぎるくらいの方が溢れていた

贅沢すぎるくらいのお安心の中にいた

でも

捨てるほどの物なんて必要なかった

安心はあって当たり前ではなかった

そして

人は小さなことに悩み大きな幸せに気づかないと知った

人は大きなことに立ち向かい小さな幸せを手にとると知っ

た



グーグー 大きないびきだな

後ろ足ピクピク 夢みてるの？

ワフワフ かわいい寝言ね

私の宝物 ずっと眺めていたい



はなみずき あなたは木 それとも花

純白のあなたも 薄紅のあなたも青空によく似合う

誇らしげに咲くあなたを見たら 嬉しくなって

あなたのように両手を上げて背伸びした

私の顔

嬉しい時は知らぬ間に笑みがこぼれ

楽しい時は大きな声でハハハと笑い

怒ると恐くてそれは憎たらしい

それなのに

悲しいと誰にも見せまいと我慢する





窓辺でピアノを弾いていた

カーテンをそっと押して

春風が聞きにやってきた

知らん顔していたら

私が奏でる音符を連れて

急ぎ足で去っていった

あ、今度は私も連れてって



大きく息をしないと胸が苦しいほどだ

生命の息吹いっぱいの中は
空気も元気な若草色
大地から這い出た命のモヤモヤが
一気に空へ駆け上がり
木々の間から生暖かい風が
私をめがけ押し寄せる



私も ブナの葉のように

揺れる光の下で風を追いかけた

山肌を駆け上がって風がやってきた

風はザワザワと賑やかな音を立て

私のいる尾根道を急ぎ足で通り過ぎた

見ると不器用なほど曲がりくねった

ブナの老木たち その枝の先から

小さな葉が空いっぱい広がっていた



山がクスクス笑い出した

「とてつもなく大きいのさ」

摩天楼の狭間に立って見上げた

垂直の壁面が続く先は高く遠い

山なら登れるかな、ふと思った

ビルの展望台から下を覗いた

遥かな谷で点のような車が走る

山のとっぺんにいる自分を想像した

暫くしてどこからか

「そんなもんじゃないよ」

山がハハハと大笑いを始めた

私にはできっこないと言わんばかり

今度はきつとてっぺんへ行ってやる

どうしたの 悲しい顔をして

どうしたの 辛い顔をして

あなたの心にそっと触れさせて

「悲しいね」と 「辛いね」と

そして

淡雪のように解けたら

涙になって流れて行くよ





ぽっかり頭上に空いた小さな空から

緑色の光と風のシャワーが舞い降りて

流れる水の天使たちが空中で踊っている

ああ、こんなにも心地よい場所は

誰にも教えない私だけの秘密基地だ

蓮華畑の真ん中に座って目を閉じた

風が幼い私を連れてきた

5才の私が

小さな手で蓮華を摘んでいた

見上げると今日も大きな空があった

